

八木景子という大和撫子 (欧米の偏見に一撃)

札幌市医師会
KKR札幌医療センター

赤坂 嘉宣

「沈黙は金」とか「言わぬが花」など昔からの金言があり、わが国の日教組教育のもと優秀とされる東大出の官僚は、敗戦のこともあって、自虐的にも、対外的な交渉で見事にこれを実践してきた。私も口の滑りが悪いこともあり、長くこれを信じてきた。

昨年11月、最後の学会参加と考え、徳島開催の乳癌検診学会に参加。ついでに母方の菩提寺が和歌山の田舎にあると聞き、その寺を訪ね、さらに以前より興味があった太地町に足を延ばした。公共交通機関では極めて不便で、和歌山からレンタカーを駆使して串本、太地経由、鳥羽までのトンネルの多い海岸に沿う、500kmに近い旅程であった。燈明崎の狼煙台跡からの太地湾、熊野灘の展望は素晴らしかったが、ここでも中国人の団体と出くわし、狭い場所でもあり、長居は許されなかった。

海岸に張り付いた猫の額のようなろくな耕地のないこの地で、寄ってくる鯨は古来海の彼方より富をもたらす神「えびす」であった。「一頭で七郷が潤う」と言われるほど莫大な富をもたらし、捕鯨を行う者の背後には、船大工や鍛冶屋、鯨販売を司る人々もおり、地域全体を潤した。肉の大半は塩漬けにして出荷もされ、骨や皮から鯨油を取り、ヒゲや筋は道具の材料にするなど、巨体をありがたく余すところなく活用した。「おくじら様」と称され鯨にまつわる祭りや伝統芸能が受け継がれており、この地の人々にとって今も身近で特別な存在で、400年の歴史を持つ捕鯨文化はしっかりと根を張り息づいている。

四隻の黒船で徳川幕府に開国を迫ったペリーは、すべてを利用しつくす太地の漁とは異なり、油を得るのみの鯨漁のために燃料と食料の補給地を求めてのことであったといわれる。今世紀に入ってから日本、アメリカ、カナダなどからテロリストと名指しされるシーシェパードの運動を支持するアメリカ人写真家でドキュメンタリー映画監督ルイ・シホヨス以下が大挙して陣取り、盗撮、ヤラセ、ウソ等、虚実取り混ぜ、効果を高めるための映像処理をはじめとして、網を切るなど犯罪的な行為もいとわず製作し、2010年なんとアカデミー賞(ドキュメンタリー部門)を得た。欧米で鯨類は人間の言葉を理解する高等動物であるという根拠のよくわからない反捕鯨運動は最高潮に達し、日本古来の文化は捕獲頭数が嚴重に制限され危機に瀕した。敗戦後の食糧難の時代にごく普通に口にした鯨は、提供する店も減り、一部で

高級料理としてしか口にできないものになってしまったばかりか、鯨を殺す日本人は野蛮で残忍な民族とまで評判を落とされてしまった。

そんな中、映画会社に居たとはいえ事務職で、製作には全く素人の日本女性が、なんとたった一人で、何の背景も持たず退職金のみを元手に、小さな家庭用ハンディカメラをもって太地町に入り、4ヶ月の間プロのアメリカ人クルーと渡り合い『Behind "THE COVE"』を製作した。太地の住民と数々のトラブルを起こし、警察沙汰も起こしたシーシェパードの連中も加わった一回りも大きい外人たちも、小柄でか細いなでしこ相手では勝手が違ったようだ。これは彼女の監督初作品であり、首尾よく2015年のモントリオール世界映画祭に出品され、2016年、なんと皮肉にもあの慰安婦(いわゆる少女像)像撤去訴訟に地元日本人たちが敗訴した、いわくつきのグレンデル市での国際映画祭でも正式上映された。日本の捕鯨の歴史について初めて知ったというアメリカ、カナダ人に少なからず衝撃を与えた。英語版のサブタイトルは"The Quiet Japanese Speak out"という。昨年4月惜しくも亡くなられた渡部昇一氏も「大したものだ、立派だ、すごい、尊敬、脱帽」と賛辞を惜しまない。

金に縁のない身には高級料理としての鯨にはほとんど関心がなく、柔らかいが真っ黒い色の生姜焼きで、サッポロビールを飲むことで十分満足している。ススキノのとある店で発見、食べていたところ、隣に座った香港人の奥さん同伴のオーストラリア人が何を食べているのかと興味津々の様子で尋ねてきたので、謹んで数切れ進呈した。反捕鯨急先鋒のオーストラリア、反応を興味津々で見ているなら、なんと満更でもなさそうに食べていた(!)。ホエールと教えてやったが、難しい反応はなかったし、丁寧にジョッキ一杯のビールを返してくれた。突っ込みを入れる語学力もなかったのもそれで終わってしまったが。

太地町はすでに追い込み漁は終わっており、訪問者も少なく町は静かであったが、機会があれば数日滞在して、居酒屋のようなところで店主の親父にゆっくりいろいろと話を聞いてみたいと、撮ってきた動画の熊野灘の潮騒の音を聞きながら、考えている。